翻刻　藤澤南岳『七香齋日録』（1）

前川知里

はじめに

藤澤南岳（一八四二―一九二〇）は、幕末から大正期にかけて、主に大阪を拠点に活躍した儒学者である。父の藤澤東畝（一七九五―一八六五）もまた儒学者であり、文政七年（一八二四）に大坂に出て泊園書院を設立したことで知られる。泊園書院は幕末の大坂において、懐徳堂に並ぶ私塾として栄えた。南岳は東畝の長男として誕生し、明治六年に父から受け継いだ泊園書院を再興し、数千人の門人を擁した。南岳は大阪の「通天閣」や日本最初の幼稚園である「愛珠幼稚園」などの命名を行った人物としても著名であり、まさに当時の大阪文化人を代表する一人に数えられる。また『墨縁奇賞』（明治二十六年）に序文を、『豫章堂茗讌図録』（明治四十二年）、『澱江茗醼図録』（明治四十二年）に跋文を記しているように、多くの煎茶図録からは南岳の煎茶趣味が垣間見える。[1] 加えて、明治三十五年頃に結成され、書画や古典籍の展示会を定期的に行った保古会に加わり、[2] 明治四十年に結成された書道団体である観鶩会において幹事を務めているように、明治期の大阪書道界の中心的な役割を担っていたといえる。

今回紹介する『七香齋日録』は藤澤南岳の日記である。藤澤南岳の日記には『七香齋日録』のほか、『不苟書室日録』、『日録』、『七香齋日程』がある。これらは南岳の自筆であり、現在、関西大学に所蔵されている。これらの資料は泊園書院から関西大学に寄贈された一群の資料に包含されており、現在、泊園文庫として位置付けられている。

これらの資料の概要については吾妻重二編『関西大学泊園文庫自筆稿本目録稿』甲部（関西大学アジア文化研究センター、平成二十四年）に詳しい。ここではまず、これを基に、『七香齋日録』の概要を確認することとしたい。『関西大学泊園文庫自筆稿本目録稿』甲部には『七香齋日録』の題が付けられている資料が計二十七冊確認できる。まずはそれらを列挙することとしたい。[3]

・七香齋日録　三冊一帙　藤澤南岳録　藤澤南岳筆　LH2／甲145―1～145―3
［内題・外題］外題「明治四十二年懐中日記」（一冊目）、「大正貳年懐中日記」（二冊目）、「大正三年懐中日記」（三冊目）

・七香齋日録　一冊　藤澤南岳録　藤澤南岳筆　LH2／甲146
［内題・外題］内題「七香齋日録」　書き付け外題「七香齋日録　明治二十五年六月　明治三十一年十月　明治三十七年九月」

・七香齋日録　一冊　藤澤南岳録　藤澤南岳筆　LH2／甲146
［内題・外題］内題なし　書き付け外題「七香齋日録　明治三十九年六月」

・丁巳遊草（七香齋日録）　一冊　藤澤南岳録　藤澤南岳筆　LH2／甲148
［内題・外題］内題「丁巳遊草」　書き付け外題「七香齋日録　丁巳遊草　大正六年五月」

・七香齋日録　丙・丁・戊　三冊　藤澤南岳録　藤澤南岳筆　LH2／甲208―3～208―5
［内題・外題］内題「七香齋日録丙（丁）（戊）」　書き付け外題「七香齋日録　丙（丁）（戊）」
［備考］
一冊目　巻首に「七香齋日録　丙」とあり、明治二十四年十月十一日から

十二月三十一日まで

二冊目　巻首に「七香齋日録　丁」とあり、明治二十五年一月一日から五月三十一日まで

三冊目　巻首に「七香齋日録　戊」とあり、明治二十六年一月一日から三月一日まで

・七香齋日録　一冊　藤澤南岳録　藤澤南岳筆　LH2／甲209

［内題・外題］内題「七香斋日録　一」　書き付け外題「七香齋日録　一」

［備考］

巻首に「七香齋日録巻之一」とあり、明治二十六年九月一日から十二月三十一日まで

第二十五葉冒頭に「七香齋日録巻之二」とあり、明治二十七年一月一日から二十二日まで

・七香齋日録　戊　五冊　藤澤南岳録　藤澤南岳筆　LH2／甲210―1～210―5

［内題・外題］内題「七香齋日録」　書き付け外題「七香齋日録　一（二）（三）（四）（五）」

［備考］

一冊目　外題に「七香齋日録　戊一」、巻首に「七香齋日録」とあり、明治二十七年十二月二十二日から同二十八年十月二十五日まで

二冊目　外題に「七香齋日録　二」とあり、明治二十八年十一月一日から同二十九年八月三十一日まで

三冊目　外題に「七香齋日録　三」とあり、明治二十九年九月一日から同三十年三月三十一日まで

四冊目　外題に「七香齋日録　四」とあり、明治三十年四月一日から八月三十一日まで

五冊目　外題に「七香齋日録　五」とあり、明治三十年九月一日から同三十一年二月十七日まで

・七香齋日録　己　十冊　藤澤南岳録　藤澤南岳筆　LH2／甲211―1～211―10

［内題・外題］内題「七香齋日録　己號」　書き付け外題「七香齋日録　一己（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）」

［備考］

一冊目　外題に「七香齋日録　一己」、巻首に「七香齋日録巻一　己號」とあり、明治三十三年八月二十五日から十月三十一日まで

二冊目　外題に「七香齋日録　二」、巻首に「七香齋日録巻二」、明治三十四年二月一日冒頭に「七香齋日録巻三」とあり、明治三十三年十一月一日から同三十四年三月三十一日まで

三冊目　外題に「七香齋日録　三」、巻首に「七香齋日録巻四」とあり、明治三十四年四月一日から八月七日まで

四冊目　外題に「七香齋日録　四」、巻首に「七香齋日録巻五」とあり、明治三十四年八月八日から同三十五年一月三十一日まで

五冊目　外題に「七香齋日録　五」、巻首に「七香斋日録巻六」とあり、明治三十五年二月一日から六月五日まで

六冊目　外題に「七香齋日録　六」、巻首に「七香齋日録巻七」とあり、明治三十五年六月六日から十月三十一日まで

七冊目　外題に「七香齋日録　七」、巻首に「七香齋日録巻八」とあり、明治三十五年十一月一日から同三十六年三月三十一日まで

八冊目　外題に「七香齋日録　八」、巻首に「七香齋日録巻九」とあり、明治三十六年四月一日から八月二十二日まで

九冊目　外題に「七香齋日録　九」、巻首に「七香齋日録巻十」とあり、明治三十六年八月二十三日から同二十七年二月四日まで

十冊目　外題に「七香齋日録　十」、巻首に「七香齋日録巻十一」、六月一日冒頭に「七香齋日録巻十二」とあり、明治三十七年二月五日から九月九日まで

・七香齋日録　一冊　藤澤南岳録　藤澤南岳筆　LH2／甲212―1

［内題・外題］内題「七香齋日録」書き付け外題「七香齋日録」

［備考］

巻頭に「七香齋日録巻之一」とあり　明治三十九年九月一日から十一月十一日まで

・七香齋日録　乙部　附　年中行事稿本　一冊　藤澤南岳録　藤澤南岳筆　LH2／甲213―1

［内題・外題］内題「七香叟日録」「年中行事稿本」書き付け外題「年中行事　稿七香齋日録　一」

［備考］

巻首に「七香叟日録巻一　乙部」とあり、明治四十年二月五日から四月十六日まで

これを概観すると、『七香齋日録』には明治二十四年から大正三年までのものがあることがわかる。このうち、『七香齋日録』丙（LH2／甲208―3）は最も早い時期に書かれたものである。したがって本稿ではこれを取り扱う。

また、『七香齋日録』以前の南岳の日記としては『不苟書室日録』の一群が確認できる。『不苟書室日録』と称されるものには『不苟書室日録』甲部十冊と『不苟書室日録』乙部七冊がある。さらに、南岳の息子の黄鵠によって編集された『不苟書室日録』十冊確認できるが、これは後に大阪朝日新聞より出版された『不苟書室日記鈔』の原文に該当するものであろう。これは『不苟書室日録』からだけではなく、『七香齋日録』からも引用、編集され、一冊に纏められている。

加えて、この『七香齋日録』と時期の一部重なるものとして『七香齋日程』十八冊が確認できる。『七香齋日程』は明治四十年から大正九年までの南岳の日記である。南岳が大正九年に没したことを鑑みると、その直前まで日記を記していたことがわかる。これは、『七香齋日録』乙部（LH2／甲213―1）の後に位置付けられるものと考えられる。

藤澤南岳の日記を取扱った先行研究としては、水田紀久による論考[4]がある。南岳の日記である『不苟書室日録』はその一部が『不苟書室日記鈔』として活字化され、刊行されている。水田はこれを読み解き、考察を加えている。さらに吾妻重二[5]は『不苟書室日記鈔』に加え、『七香齋日録』、『七香齋日程』などの資料を読み解き、南岳の芸術観および印章について考察している。

南岳の日記には当時の京阪に住まう文人が多く登場するとともに、南岳が訪れた煎茶会や書画展観会、古物会などの様子が詳細に記されている。そこに参加していた人物や展示物に対する批評も多く見られ、こうした記述は、当時の大阪における文墨世界を考察する上で重要な資料であるといえる。また前述の通り、南岳は保古会に加わり、観鵞会の幹事を務めていたが、その他にも逍遥遊社や進正社、菅廟吟社、其争社など多くの会に所属していた。南岳の日記にはこれらの会の集会の様子も詳細に記されており、その活動の実態を確認することができる。さらに南岳は、大阪博物場に足繁く通っており、日記にはそこで催されていた展覧会や煎茶会の様子が詳述されている。このように、大阪博物場の実態を探る上でも南岳の日記は重要な資料となり得る。

本稿では『七香齋日録』丙を翻刻し、注釈を付してこの資料を紹介する。これによって、明治中期の大阪文墨界の具体的なすがたを明らかにすることができるものと考える。また『七香齋日録』中、今回紹介したものはその冒頭にあたるものであり、これ以降は順次紹介していくこととしたい。

【凡例】

・翻刻の漢字の表記は原文に従っている。但し、異体字等については翻刻の関係上、一部正字に直している。

・読みやすくするため、句読点は適宜施している。

・追加や文字の転倒などは記号に従って本来の位置に配している。また、抹消箇所についてはこれをとらなかった。

・本文中の空欄については□で示している。
・本資料は一日毎に翻刻し、注釈を施している。
・人物名には傍線を施している。但し、歴史上の人物についてはこの限りではない。
・注釈は既出のものについては再録しない。

翻刻

明治辛卯十月十一日。晴。為舊暦重陽、余之初度實壬寅重陽也。自暦法一改、乃月用十月日用初九以為誕辰、不得已之計耳。故毎値舊重陽、自慶、以懐親恩、亦情之所不可已也。此日八尾進正社會、而木村小園有同窗會、亦来邀、故辰牌出門、至天王寺、搭滝車。至八尾、訪藤陰、社友皆會、深瀬氏獨有事不来。申牌訪小園會方盛矣。揮毫飛杯各従所好。點燈後辭去。八尾三壽藏送、至平野堤、厚情可掬。至停車場、則月色耿々、玻璃窓中如畫、窓外平地一白、樹影真如荇藻、偶有過雁点、字一行吟懐。頗適敲句。待車不覚其遅也。戌牌歸家。雖非登高、亦足以酬、佳節且値嘉節。方五十回回顧。往日茫乎、如夢事業碌碌、莫有足傳者、不知自今、以後能倣何事乎、乃驗之于斯志而已。

明治辛卯…明治二十四年。

重陽…九月九日。

木村小園…（一八二九―一九〇四）。豊三郎と称し、後に小園、嘯園と改めた。また、送月斎主人と号した。河内国正覚寺村（平野区）の人である。国学を名和大年に、絵を田能村直入に、漢学を藤澤東畡について学んだ。明治五年には小学校教員となり、数年して祥敬塾（のち橘島書院）を開き、国学と書道の普及に勤めた。また、山水に遊んで詩画小巻を作ることを趣味とし、雅事を好んでいた。（藤澤南岳編『菁莪録』、大正二年、二〇―二一頁）

八尾…若江郡八尾村。現在の八尾市本町一―七丁目、東本町一―五丁目、南本町一―八丁目あたりを指す。

進正社…明治十九年に結成された団体である。明治二十六年九月十日の『七香齋日録』（LH2／甲209）に「取諸易漸豪傳進以正可以正邦也」とあるように、『易経』からこの名称がつけられた。また、創設については同日の日記に「此會木村嘯園、木村藤陰、木村東塢、長崎□□、久保田真吾所創也。而林風外、林秋圃、橋本□□相継来、加社」とあり、木村嘯園、木村藤陰、木村東塢、長崎、久保田真吾が進正社を創ったことがわかる。そして後に林風外、林秋圃、橋本紫玉らが加わった。

天王寺…大阪市のほぼ中央部に位置する。四天王寺があるため、当地付近が天王寺といわれてきた。

藤陰…木村藤陰。進正社の会員である。

深瀬氏…詳細不明。

八尾三壽藏…詳細不明。

平野堤…平野郷町にある。平野郷町は大阪市の南東部に位置する。八尾と隣接している。

高登…中国で、陰暦九月九日に厄を払うために高い山に登って菊酒を飲む風習。

十二日。晴。菅廟講筵、与敷田年治話半晌。

菅廟…大阪天満宮を指すものと考えられる。

敷田年治…（一八一七―一九〇二）。幕末、明治期の国学者。蛭子神社神職吉松能登守の養子。帆足万里、渡辺綱章の門で和漢の学を学び、文久二年には和学講義所の教官となった。明治元年に大阪に移り住み、北堀江に私塾を開いた。（石田誠太郎著『大阪人物誌』正、思文閣出版、昭和四十九年及び管宗次著『敷田年治研究』、和泉書院、平成十四年）

十三日。晴。真部天真、窪田昌来。閑棋了日。

真部天真…詳細不明。南岳の日記にしばしば登場することから、近しい関係にあった人物と考えられる。

窪田昌…内外科医。大阪東区に体格診査所を設けた。また編集を務めた書籍に『蘭疇』（明治三十五年）がある。（山田修佐著『京都繁昌記』、学文館、明治二十九年、巻末公告）

十四日。晴。亀尾肇来。肇一失歩百、方不售、来訴苦者數、而余無如之、何相對悵然耳。夜課復文于諸子。

亀尾肇…泊園書院の『登門録』にその名が記載されていることから、泊園書院に学んだことがわかる。著書に『教育勅語修身解』（明治三十四年）や『教育歴史譚小楠公』（明治三十四年）などがあり、編集を務めた書籍としては『美文の指針』（明治三十四年）や『金言海』（明治二十八年）などがある。また、亀尾が著し、南岳が閲した書籍として『みさをかゝみ』（明治二十三年）という女訓書がある。（『登門録』（LH2／丙122、関西大学所蔵）、明治三十七年、四、一六頁）

十五日。晴。末野氏小集、澤井甃平、小野田篠菴、窪田昌及余并主人、而五環坐敲棋弄杯。戌牌散去。此夕係九月仲三。蹈月緩歩、情趣自佳。

末野氏…末野狸郷カ。詳細不明。

澤井甃平…蘭学者。『磐舟永田翁傳』には甃平について「當時に於ける蘭學の篤學者であって、其友人には故星亭などもあり、世の新智嚢者を以て知られて居た」とある。しかし、「追々入來する英米人の指導によって直接の教授を受けるものが多くなったので舊に止って進まない澤井先生は世間から骨董扱ひにされた」とあるように、多くの英米人が訪れるようになってからはあまり奮わなかったようである。甃平は成章塾を主宰しており、門下生には永田磐舟のほか山中繁次郎、武田長兵衛、井原百介、河野徹志などがいる。（野田廣二著『磐舟永田翁傳』、昭和四年、二三―二四頁）

小野田篠菴…蘭法医。篠山藩士小野田与十郎の弟である。江戸幕府医官松本良順について医学を修め、その後長崎に渡ってポンペ、ボウードインについて西洋医学を本格的に学び、晩年は大阪に帰って開業した。南岳は『七香齋日録』丁（LH2／甲208―4）の明治二十五年二月四日条に、篠菴が逝去したことについて記載している。そこには、「篠菴姓小野田、丹波篠山人。成童遊浪華、承業于篠崎小竹、後従先子。詩文大可観、而志在以軒岐家成。乃従緒方洪菴、又遊長崎、善洋医術。遂應彦根藩聘為病院長、又歸大坂、以医終歳六十有二。天資質実剛毅、故人或忌其言、然忌嫉者皆誤矣。真可憐者」とある。そのため、この頃は大阪で医者として活躍していたものと考えられる。

十六日。謁先子墓、直訪木原忠別荘。蓋主人會同人、以賞月也。會者凡十七名、有茶室、有棋齋、以待月、々將升時、命酒供肴、衆皆快適。過戌牌而散会。

木原忠…木原忠兵衛カ。木原忠兵衛は両替商を営む家に生まれ、明治十三年に木原銀行を設立した。明治二十七年には日本中立銀行を興し、頭取に就任している。また、日本美術協会大阪支会奨励会の会員を務めているように、美術に対しても造詣が深かった人物として知られている。

十七日。晴。欲訪増本剛齋、辰牌上途、西尾隆従焉。到天王寺、搭瀛車、車客頗多、不堪煩熱。至柏原、下車、従小徑緩歩、謁道明寺菅廟。訪上田古香、訂明日會而去。謁譽田廟、拜帝陵。至臥龍橋、命人車入通法寺里、訪増本氏。剛齋喜迎、鼎坐話詩。此日秋社、々鼓喧闐、而山村秋色、自可人意、話至夜半而寝。

増本剛齋…詳細不明。
西尾隆…詳細不明。
柏原…志紀郡柏原村。現在の柏原市本郷一―五丁目、古町一―三丁目、今町一―二丁目、大正町一―三丁目のあたりを指す。
道明寺菅廟…道明寺天満宮。道明寺の東側にある。
上田古香…詳細不明。
誉田廟…誉田八幡宮。誉田御廟山古墳の後円部南方に境内がある。「拜帝陵」とはこれを指すのであろう。
通法寺村…壺井村の南にあり、村名は寺院通法寺があったことによる。
臥龍橋…大阪府羽曳野市市川向にある。

十八日。天曀、旭日收光。剛齋命車送余与隆于玉手山、到石川堤。東風頗緊。昨日晴暖、今日則凄冷、与世態人心同一機。自臥龍橋東、々折五丁餘過逢坂橋、従堤西廻、以到圓明村、傍山麓北至玉手、乃下車、歩窮山頂、放眸養情、々況甚快。踞旗亭以喫茶、既而至安福寺。吟友未来。差午皆集林鳴鶴也。上田石水也。小泉和溪也。池田古禅也。岡田松窓也。同白雲也。田中積翠也。吉村赤松也。杉浦可無也。本田瓢岳也。上田古香也。并余与隆、十有三人。環坐團欒、杯觴幾行酒、已酣。或画或敲詩。古禅、積翠在別齋、弄清笛、揭琴、相和、作曲、音吐喨々。別添風致、時天將雨、乃辭歸。古香送至山下、命車送余于柏原、遂搭滊車以歸。々途値雨、々不堪猛。至家則燈已點矣。
剛齋…増本剛斎。
隆…西尾隆。
玉手山…現在の大阪府柏原市にある。
石川堤…大阪府南東部に流れる大和川水系の一級河川を石川という。
逢坂橋…現在の大阪府羽曳野市駒ヶ谷にある。
圓明村…現在の大阪府柏原市の南西部に位置する。
安福寺…現在の大阪府柏原市玉手町にある浄土宗知恩院派の仏教寺院。
清笛…清楽に用いる竹製の横笛。長さは六十六センチメートルほどである。両端には象牙または唐木の飾りがある。指孔は六個で、歌口と第一指孔の間に響孔があり、これに竹紙が貼ってある。
林鳴鶴…詳細不明。
上田石水…詳細不明。
小泉和溪…詳細不明。
池田古禅…詳細不明。
岡田松窓…（一八六四―一八九五）。実業家。岡田伊一郎の長男として、河内国丹南郡岡村に生まれる。明治二十七年、岡田家は個人で岡田銀行を開業した。経営は当初順調であったが、のちに停滞し、明治三十四年に金融恐慌の影響で自主廃業した。その後、明治二十九年に開業した更池銀行の第三位株主として金融業との関係を続けていく。一方、松窓は名利に無欲で、役職を辞し、俗世を離れた生活をした。松窓は幼少から土屋鳳州の門に遊び、漢籍を修め、詩文を学んだ。また、小野湖山、五十川訊堂、藤澤南岳に益を受け、才能を開花させた。漢詩文結社「逍遥遊社」のメンバーでもある。著書に『松窓詩鈔』、『松窓遺稿』がある。（『大正人名辞典』上、日本図書センター、昭和六十二年）
岡田白雲…詳細不明。
田中積翠…詳細不明。
吉村赤松…詳細不明。
杉浦可無…詳細不明。
本田瓢岳…詳細不明。

十九日。晴。南遊僅々二日、而来牘作山。裁報書、殆半日。閑中之忙可咲。

二十日。晴。田部洗蔵来。快話数刻、大強人意。

田部洗蔵…田部苔園。（一八三八―一九一〇）。漢学者。名は密で号は苔園。洗蔵は字である。彦根藩に仕えて藩校に学び、明治二十三年に大阪に移り住み、大阪鉄道会社の社長となった。巌谷一六、小野湖山らと交わり、詩文を善くした。（石田誠太郎著『大阪人物誌』巻三、石田文庫、大正十五年）

二十一日。晴。午後携児章、訪倉杏園于守口。此日為其社祭日。杏園閑暇無事、故對棋寄傲也。薄暮辭歸。杏園命車、相送。此日風光晴暖、瘦峰漲水、皆適吟情。而児女来、往社鼓鼕、々亦可克、一楽事也。

児章…南岳の次男である章次郎（一八七六―一九四八）を指す。章次郎は後に黄坡と号する。当時は十四歳であった。

倉杏園…詳細不明。

守口…現在の大阪府北河内地域に位置する。

児女…南岳の娘である敬を指すものと考えられる。

二十二日。晴。為座摩社秋祭。午後、欲訪永野氏、過末野狸郷、乃棋至暮。夜、讀風月堂詩話。清雅而多警竒可喜者。曰三言七言、皆源于詩經。曰退之云、餘事作詩人、非篤論也。曰刘貢父見晁美叔集句、鄙之。曰或謂東坡過海雖為不幸、乃魯直之大不幸也。曰夜半鐘南史載之江浙間至今有之以辨、永叔忘之、皆可為徴矣。

座摩社…現在の大阪府大阪市中央区にある神社。摂津国一宮を称する。

永野氏…永野文良（一八二二―?）カ。永野文良は大阪で開業していた眼医であり、秀水と号した。百生元碩の門下である。しばしば『七香斎日録』中に名が登場する。（小川劍三郎「眼科史料」『実験眼科雑誌』一〇七、実験眼科雑誌社、昭和五年、四五一頁）

風月堂詩話…南宋の朱弁による詩論。

退之…韓愈（七六八―八二四）。唐の文学者・思想家。唐宋八家の一人。昌黎の人ともいわれるが、河陽の人。字は退之。詩では白居易とともに「韓白」と並称される中唐の代表的詩人である。思想家としては、儒教中心主義を強調したことで知られる。（日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』第五巻、小学館、昭和四十八年）

刘貢父…劉貢父（一〇二三―一〇八九）。北宋史学家。

東坡…蘇東坡（一〇三六―一一〇一）。中国北宋の詩人であり政治家である。四川省の生まれ。名は軾、字は子瞻、号は東坡。文人として世に知られる。唐宋八家の一人で、父蘇洵、弟蘇轍と合わせて三蘇とよばれる。韓愈、欧陽修を継いで古文を発展させた。（日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』第十一巻、小学館、昭和四十九年）

魯直…黄庭堅（一〇四五―一一〇五）。北宋の詩人であり書家である。分寧の人。字は魯直、号は山谷道人。蘇軾とともに蘇黄と並称される。北宋後期を代表する文人とされるが、江西詩派の祖としての後世への影響が大きく、日本でも五山の僧に愛好された。（日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』第七巻、小学館、昭和四十九年）

永叔…欧陽脩（一〇〇七―一〇七二）。北宋の政治家であり、学者である。字は永叔、号は醉翁、謚は文忠。古文を復興した文章家で、唐宋八大家の一人に数えられる。（日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』第三巻、小学館、昭和四十八年）

二十三日。晴。其争社友會于網洲。石崎精處為會幹、會者田中越山、白山滴翠、澤井梨平、末野狸郷等十有三名。以秋景淘汰性情、亦半日閑福也。

其争社…南岳が参加していた団体。『七香斎日録』中にはたびたびこの名が見える。網洲の金波楼に会することが多かった。其争社の会合では、酒

を飲み、将棋を指すことが多かったようである。

網洲…現在の大阪府大阪市都島区あたりを指す。

石崎精處…（一八二九―一九〇六）。大阪で酒屋を営なむ。煎茶を好み、名器を愛玩し、和漢の書画及び茶器などを多く所蔵したことで知られる。（石田誠太郎著『大阪人物誌』正、思文閣出版、昭和四十九年）

田中越山…（一八三一―一九〇五）。名は方安、越山は号である。越中井波町の人。大阪で医業を営んでいた。南岳は越山を「習茶儀、豪飲酣酔、交友頗雑、爲異也」と称しており、ここから豪快な人物であったことがわかる。（『菁莪録』、二一―二二頁）

白山滴翠…詳細不明。

二十四日。陰雲欲雨、而不雨。夜訪多木氏。

多木氏…多木豊カ。舞湾と号した。『七香斎日録』にはたびたび多木氏を訪問し、時には将棋を指したという記録ある。ここから、南岳と親しい人物であったことが想像される。

二十五日。晴。拉鎌田衡、會逍遥遊社友于北郊、遂散歩趣興、至暮而歸。吟會月幹中井子弘、設筵于植木茶屋。余至最早、次而来者五十川士深、近藤純叔、近藤子同、関子錫他来。頒韵字定席上課題。余以病辭会。与衡聯歩北踰新橋、々架十三川也。随意散策廻至本庄村、北山之秀、長江之潔、自使心氣爽快。呼渡而南、与衡別、訪松尾日軒、話少頃而会。此亦一逍遥也。夜与澤井、真部會于多木氏、棋戦數局、亥牌散歸。

鎌田衡…西区南堀江下通の人。『登門録』にその名が記載されていることから、泊園書院に入門していたことがわかる。また、大正十一年に刊行された『泊園書院学会々報』（泊園書院学会）に「讀書私見一則」の稿を寄せている。（『登門録』（LH2／丙122）、四頁）

逍遥遊社…明治十九年十一月に左氏球山、近藤南洲、岡田聿山らの発起によって結成された漢詩文会。南岳も当初からのメンバーである。（吾妻重二編『泊園書院歴史資料集―泊園書院資料集成一―』、関西大学出版部、平成二十二年、一一一頁）

中井子弘…詳細不明。

五十川士深…五十川訊堂（一八三五―一九〇二）。名は淵、卓爾、字は士深、通称は卓介、左武郎、号は初め勤斎のち訊堂、訊堂学人、訊堂小史と称した。福山の人。藩医五十川義集の次男である。藩校誠之館で関藤藤陰に学び、姉の夫である江木鰐水の薫陶をも受けた。その後、昌平黌で林鶴梁などに学んだが、在学二年にして帰国し、森田節斎の教えを受けた。明治十四年には、大阪府師範学校教諭に任じられ、十六年勤続した。この時はまさに大阪府師範学校教諭に勤務していた時期にあたる。（濱本鶴賓著『福山の文人誌（復刊版）』、葦陽文化研究会、昭和六十三年）

近藤純叔…近藤南洲（一八五〇―一九二二）。伊予国松山の人。名は元粋、字は純叔、号は南洲、蛍雪軒である。伊予の心学者である近藤名洲の三男として生まれる。藤野海南、芳野金陵に就いて漢学を修め、明治三十七年には大阪で風騒吟社を設立した。（三島竹堂編『浪華摘英』、大正四年、六六頁）

近藤子同…近藤石顛（一八五七―?）。南岳と同じ四国讃岐の人。豊後の人である物集高世や敷田年治について国風や風土記などを学び、明治二十年に大阪に移り住んだ。篆刻を善くし、南岳の印も何顆か刻している。画は森琴石に師事した。（『浪華摘英』、七〇頁）

関子錫…（一八一六―一八九五）。名は関永で子錫は字である。有蔵と称し、後に文平と改めた。別号に楓陰がある。篠山藩の人。嘉永四年に藤澤東晹に入門した。篠山藩儒であったが、廃藩後は大阪に移り住んだ。南

岳は子錫を「天資温厚、寛以容人、文才秀偉、精能服人、而笑談戯謔、和以保身、實藝圃之英也」と称しているように、優れた人物であったようである。（『菁莪録』、一八―一九頁）

十三…現在の大阪府大阪市淀川区南西部あたりを指す。

本庄村…大阪市の北に位置しており、北野村や川崎村に隣接していた。

松尾日軒…詳細不明。

澤井…澤井甃平カ。

真部…真部天真カ

多木氏…多木舞湾カ。

二十六日。晴。中井子弘来。乃嘱使寫徠翁真。

徠翁…荻生徂徠（一六六六―一七二八）。江戸中期の儒学者、思想家、文献学者。林春斎、林鳳岡に学んだ。後に柳沢吉保に用いられ、古文辞学を大成した。（上田正昭他監修『日本人名大辞典』、講談社、平成十三年）

二十七日。晴。夜訪多木氏。微雨即霽。

多木氏…多木舞湾カ。

二十八日。晴。早朝地震。朝講方半不能終程而廃、脩書于児元及間中、佐竹等、以問其無恙与否。午後諸州異聞稍達矣。蓋濃之岐阜大垣、尾之名古屋、烈家已潰矣。火隨之烟焔未收云。

地震…明治二十四年十月二十八日、六時三十八分五十秒ころ濃尾地震が起こった。M八・〇。死者は七二三七名に及び、全壊家屋は十四万二一七七戸を数えた。

児元…南岳の長男である元造（一八七四―一九二四）を指す。元造は後に黄鵠と号する。当時、黄鵠は上京して神田の共立学校で学んでいた。

間中…詳細不明。

佐竹…詳細不明。

濃…美濃。

尾…尾張。

二十九日。晴。来唁禍者紛々、而傳尾濃災状稍詳矣。大垣、岐阜、笠松、謂之、全焼亦可矣。名古屋亦焼者過半、死者不可知為幾千人。嗚呼、旻天不弔、災害薦臻、可嘆哉。尾濃以東電線絶矣。銕軌壊矣、故異状不可知。乃恐東京最更甚、懐児元、不可堪、而不可奈何。薄暮得駿相以東震至微之報于末野氏、吾心稍降。天真来、棋以破悶。

児元…藤澤黄鵠。

末野氏…末野狸郷カ。

天真…真部天真。

三十日。晴。試生徒業、定其席次。夜狸郷来。閑棋遣興。甃平亦来。鼎坐閑話稍慰、懐児之情。

狸郷…末野狸郷。

甃平…澤井甃平。

児…当時、上京していた藤澤黄鵠を指すものと考えられる。

三十一日。晴。午後與稲垣士廉遊左専堂村。々人後藤作号松齋、其弟孫号松濤、宮田八号松琴與森河内僧、河野顕往号春澤、天王田村人中嶌岩号椋陰者結詩社名咬莱、邀余請正者既已五年。此日松琴為主人設筵于其観耕樓上、同賦秋園閑興、分青邱啼鳥空林一家、為韻一吟一酌、或画或棋、興情静幽。而晴日和、風既含小春氣象、鳥語雲影添一般、真趣詩皆成、各書青箋、不覺残陽在山、會散則日已沈矣。緩歩而歸。岩従、至其門前、以途暝被、借提燈、至志喜多橋北、命車而

歸。々則諸友遠、以書相訪問者満案、而知東京震實微、怡然就寝。

稲垣士廉…稲垣秋荘（一八三五―一九〇一）。幼いころから文字を解し、書を巧にし、神童と称された。奥野小山に子どもがいなかったため、藤澤東畯の薦めによって小山の養子となった。小山の没後、泊園書院の助教となったが、東畯の没後はその教授のことを掌った。明治維新後は住吉郡に隠退したが、南岳が泊園書院を再興するにあたって、南岳に招かれて帰阪した。（『東区史』第五巻（東区役所、昭和十四年）二八八―二八九頁）

左専堂村…現在の大阪府大阪市城東区諏訪あたりを指す。

後藤松斎…後藤松濤の祖父の兄。左専堂村の人。詳細不明。

後藤松濤…後藤松斎の弟孫。左専堂村の人。南岳が亡くなった際に、『大正詩文』に「挽南岳藤澤翁」の題で「屈指蒙恩五十年、温顔接客宛神仙、忽然歸道無窮恨、玉樹泉臺一片煙」という詩を寄せている。ここから、明治初年頃から南岳と交友があったことがわかる。（『大正詩文』、雅文会、大正九年、三二頁）

宮田八…号は松琴。左専堂村の人。詳細不明。

森河内僧…左専堂村の人。詳細不明。

河野顕往…号は春澤。左専堂村の人。詳細不明。

天王田村…現在の大阪市城東区天王田あたりを指す。

中嶌岩…号は椋陰。天王田村の人。本文中に咬菜社を結成したことが記されている。

咬菜…咬菜社。中嶌椋陰が結成した団体である。本文中に「邀余請正者既已五年」とあるように、南岳は頻繁に咬菜社に招かれており、『七香斎日録』中にしばしばその名が登場する。

十一月一日。晴。奉讀□勅語。木村貞、八田岩為掌讀。式畢、揮毫數箋應友生請也。午後獨歩逍遥、遂訪中野氏于天王寺庄、呼渡于今市、以入其村、渡口水漲、風和帆、白草秋景清澹、可以洗眼也。入村一丁餘、至其門。主人方与二客棋、々声丁々。主人停手喜迎、急延其堂、乃坐傍観棋、亦可以洗心也。芳酒嘉餅、以添話趣、既而黒田三、高垣良亦来、興情頗適、薄暮辭去。主人命車、々隨淀堤、所過村三場新家皆在堤下、夜色亦可愛。過長柄橋、入北郭、戌牌歸家。

木村貞…詳細不明。木村眞の間違いか。木村真一。伊予の人。『登門録』に名が記載されている。（『登門録』原稿一（LH2／丙108―1））

八田岩…八田岩馬。大坂の人。『登門録』に名が記載されている。（『登門録』原稿一（LH2／丙108―1））

中野氏…詳細不明。

天王寺庄…現在の大阪市東淀川区南東部および旭区太子橋の一部にあたりを指す。

今市…現在の大阪市旭区あたりを指す。

黒田三…詳細不明。

高垣良…『登門録』には西成郡豊里村に高垣良蔵、高垣良文の二名の名が記されている。ここに登場する「高垣良」がどちらを指すのかは不明である。（『登門録』（LH2／丙122）、一二頁）

二日晴。菅廟講後、吊木村治作其女阿孝死也。夜訪多木氏。

木村治作…詳細不明。

多木氏…多木舞湾カ。

三日晴。為天長節、章旗満街、遊客繽紛。余則為堺高等小学校主和田氏所招、蓋去月高宮徹石為此校寫本邦忠孝人物像以作屏風一雙、忠臣十有八為其一雙、請余賁、至是装成、故有此招也。巳牌搭渢車、根津堅従焉、到堺。直上其校、市長議員等皆在焉。號鐘三声、衆會講堂、奉讀□勅語了。有誦祝天長節文者三名、而

式畢、小酌相慰。又与徹石、廣岡巴等、到菅廟。々有一笑社茶讌也。茶筵二酒場一、皆清雅有趣讌了。別歸。々途謁住吉社。訪津守氏、酉牌歸家。夜与澤井氏棋。

天長節…天皇の誕生日を祝った祝日。明治六年に国の祝日とされた。

和田氏…詳細不明。

高宮徹石…「明治一五年絵画共進会出品画家々名一覧」

(https://www.tobunken.go.jp/materials/banduke/806931.html、令和元年十一月二十五日アクセス）に名がみえることから、これに出品した経歴を持つことがわかる。

根津堅…詳細不明。

堺…大阪湾に面し、大阪市の南に位置する都市。また、その市街地を中心とする地域を指す。当時の市長は一樋作兵衛である。

廣岡巴…詳細不明。

一笑社…詳細不明。

住吉社…現在の大阪府大阪市住吉区住吉にある神社。

津守氏…詳細不明。

澤井氏…澤井甃平カ。

四日。晴。児章伍中学校行軍早朝発、蓋遊金剛山也。夜訪多木氏。天真亦来。而天忽雷雨、皆驚天氣不定。戌牌歸、夜半雨雹。

児章…藤澤黄坡。

金剛山…現在の奈良県御所市と大阪府南河内郡千早赤阪村との境目にある山。

多木氏…多木舞湾カ。

天真…真部天真。

五日。晴。夜澤井、白山二氏来。

澤井…澤井甃平。

白山…白山滴翠カ。

六日。天陰、巳牌微雨。思章、此日登山巓、憂其艱于途、已乍晴余喜可知也。差午欲遊昌隆社茶讌、業務繁忙竟不能往。申牌訪永野文良、弄棋両三局、而歸。

章…藤澤黄坡。

昌隆社…煎茶団体。明治九年に九人の同志によって結成された。結成当初は明九社の名であり、その後昌隆社に改名された。大正十四年にはその五十周年を記念して、盛大な五十周年記念茗讌を催している。（『昌隆社五十周年記茗讌図録』、昌隆社、大正十五年）

七日。晴。宮田八、牧山登、多本豊、田結荘千里、山田俊卿、澤井甃平来。

牧山登…詳細不明。

多本豊…詳細不明。多木豊の間違いか。

田結荘千里…（一八一五―一八九六）。陽明学者、画家、砲術家また実業家でもある。大坂堂島の人。諱は邦光で、通称を斎治。千里は号である。九歳の時に篠崎小竹の門に入った。天保八年に塩平八郎の乱に連座して獄につながれたのち西洋画を学ぶため長崎に赴いた。しかし、オランダ船が港に入るのを見て、男子たるもの絵筆をとるべき期にあらずと筆を投げ捨て、品川藤兵衛に就いて蘭学を学んだ。嘉永元年に大坂に帰り、洋式砲術を教えた。弘化二年に刊行された当時の大阪文化人名簿である『浪華名流記』には画家としてその名が記されていることから、画家としても著名であったことがわかる。また、千里の墓誌は南岳が撰しており、ここからもその交流の一端が窺える。（朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典』、朝日新聞社、平成六年及び『玄武洞文庫展：幕末・明治期大阪の偉才田結荘千里の足跡：平成１５年度大阪府立中之島図

書館初夏の展示』、大阪府立中之島図書館、平成十五年及び『浪華名流記』、弘化二年）

山田俊卿…（一八三一―一九二一）。医師。明治十二年から十九年の間、大阪鎮台病院に勤務した。退職後は盲唖学校を設立し、さらに桃花塾、博済病院、大阪慈恵病院を設立するなど様々な社会事業に貢献した。（山本安蔵編『可耕山田俊卿先生小伝』、心学明誠舎、大正十一年）

八日。晴。為進正社會期日。辰牌走天王寺、晨氣爽快、野色鮮美。乃搭瀘車、以到八尾、訪藤陰。社友皆集、深瀬、長崎二氏不来。酉牌与小園共搭瀘車、別之于平埜、而歸。

藤陰…木村藤陰。

深瀬…詳細不明。

長崎…詳細不明。

小園…木村小園。

平埜…現在の大阪市平野区あたりを指す。

九日。晴。皇太后将以明日過大坂。街衢紛擾、各有所呈賀、博物場偕行社装飾尤美。余亦走南郊、観港町停車場。直訪林檪窓、話詩翫棋、而歸。

博物場…大阪博物場。大阪博物場は、その名称を明治十一年に「公立大阪博物場」、明治十七年に「府立大阪博物場」と時期によって変更している。大阪博物場は明治八年に創立し、昭和二十年の大阪大空襲によってほぼ焼失するまで七十年間存在していた。埜上衛「大阪府立博物場の考察（1）―明治期公立博物館の活動―」『近畿大学短大論集』十一巻二号（昭和五十四年）一一三頁では、大阪博物場は大正六年の府立商品陳列所移築によって廃止されたと言及しているが、後々田寿徳は「大阪博物場―「楽園」の盛衰」『東北芸術工科大学紀要』No.16（東北芸術工科大学、平成二十一年）二六頁において、大阪博物場は昭和二十年の大阪大空襲によって焼失するまで存在していたことを、新資料を用いて指摘している。したがってここでは後々田の論考を参照し、大阪博物場の廃止時期について昭和二十年とした。

偕行社…詳細不明。

港町停車場…現在のＪＲ難波駅である。明治二十二年に貨物駅を併設した港町駅が開設され、南部の貨物ターミナルとしての機能も担った。

林檪窓…林信。著書に『論語集益』（光風社等、明治十八年）があることから、儒学者と考えられる。

十日雨。使生徒奉迎皇太后于途。午後衝風雨、到博物場。拝玉座一、場美与平日加者幾等、所新栽菊花亦大可賞。遂走網洲、回到天満橋中央、拝鹵簿、而歸。々則會多木舞湾来、對棋至夜。

十一日晴。永野秀水、清原真弓、高宮徹石来。与秀水棋數局、交綏而罷、約明日相訪。

清原真弓…詳細不明。

十二日晴。増本剛斎来。謝前日相訪也。余聞純叔病、将問之、故共出門、訪純叔、既癒。歸途、訪永埜氏。山田俊卿、森華□□來。環坐、弄棋數局、散会。

純叔…近藤純叔。

永埜氏…永野秀水カ。

森華□□…森鼻宗次（一八四八―一九一八）カ。緒方洪庵の後継者であり、万延元年に久太郎町に独笑軒塾を開いた。明治七年には堺県医学校長となった。（中野操著「堺県医学校と校長森鼻宗次」『日本医史学雑誌』、日本医史学会、昭和二十九年、一九―二五頁）

十三日晴。剛齋来話、聞及備前閑谷黌事、且告明日将往遊焉。剛齋乃約同行而去。黌蓋芳烈公所創也。矣之賢明不獨備人仰之而已。其治國撫民、悉以聖緩為典、而此黌所以造士也。嘗得黌史、讀之、益思一。往観去月念四日約往不果、故更約明日云。

剛齋…増本剛斎。

備前…岡山。

閑谷黌…江戸時代の岡山藩の郷学。寛文八年、藩主の池田光政が民間子弟の教育のために領内各地に手習い所を設置したが、間もなく廃絶し、同十年に学校建設を命じて元禄十四年までに完成した。明治三年に閉鎖されるも、明治五年夏頃より再興に向けた運動が行われ、明治六年に閑谷精舎として開校した。その後、明治十年に閉校となり、明治十七年に閑谷黌として開校した。黌長は岡山県参事の西毅一が務め、英学、漢学、数学の三教科が教えられた。閑谷黌は後の明治三十五年に私立閑谷中学校と改称された。(藤原幾太編『閑谷学校史年表』、昭和六年)

芳烈公…池田光政(一六〇九―一六八二)。江戸前期の備前岡山藩主である。利隆の子。初名は幸隆である。父の歿後、播磨藩を継ぐが、幼少を理由に減封され鳥取城へ移った。後に鳥取から岡山に入城し、三十一万五千余石を領した。(『日本人名大辞典』)

十四日。辰牌剛齋来。乃共発、田端和従焉。至梅田、搭瀛車。此日晴暖如春、過野里、佃、二水、々色映衣。經尼崎城北右冑山、到西宮。思櫻井矣幽栖、而不得訪之、左望則海色已照面、布帆為隊、頓忘城中之塵氛、右嶺已逼、則既達神戸、欲謁楠公廟、訪折田五峯。而無暇餘、直換乗山陽瀛車、而進淡嶌、漸近車穿松林、潮声打軌、須磨、舞妓諸浦風景、太適吟懐。遂經明石、大久保、土田、加古川、阿弥陀、至姫路下車、中火以車発、時刻方改不得輙発、憩茶店、四望遣興。而山嶺遥轉眸中者、皆不識名、只覚不惹塵埃已。未上牌始発、城樓雉堞如相送者、山轉則已為網干、到龍野、車留者數刻、得詳左右地勢、山蛮擁龍野邑者尤佳、而城雉不入眼、在山隈耶、将歸隳壊耶、南之山最高者呼金剛、其南室津所在、而不可望、要之、山嶺稍逼眼畍、漸狭國境、漸近也。過那波、到有年、車復留者數刻、貯水點燈。蓋将穿隧道去也。既発、地勢稍高、車進太遅、過両峯間、輾小嶺上者數矣。播州尽入備州、已近三石。而有隧、々長六百餘歩、可謂大工事。過三石、至吉永、下車。即逢中野壽、来迎、壽為我書院都講數年、一昨年来為閑谷教授、實此遊、西道主人也。走進曰相待者半日、乃謝其勞。閑谷在吉永東南二十餘町、而人車一輛而已。乃使剛齋駕、而先行。余與壽、和歩、出驛。暮色未全瞑、樹影在地、仰見、璧月于前林之間、相顧。楽之、漸入山間、有村曰南方將出村、左有粉壁寺也。門堂不可詳認、而知其非尋常。小刹過、之路、稍陟。々數丁而降。無復人声、只有娟月。相伴、而向月者為多、乃知東行為多已、而有池、路面之、漸行、則月在池心、漾々。金波従風陣、而成紋。即停杖、四望。沙湾苔岸、一碧一白、水波之外、又作水色、池大小、不可測、而月光所及、則冥々暗々、遥岑巡巒、共歸。茫々画、實不能描耳。時見一燈、光隠見于前林際、壽曰剛齋所乗車也。余惟渠已、在里餘、而猶僅隔十餘丁。豈路迂而見遠如近乎。将路險而車不能疾進乎。四顧少頃、不堪嵐氣侵衣、乃進入山。有坂、々窮則左有小屋閑谷校教員所寓云。遂左石垣而下、轉而右取小逕而陟、則西薇山宅也。薇山為達三郎所養、遂嗣其家。嘗為備州大参事、今為國會代議士。達三郎嘗従先子遊、今已亡矣。而情誼所在薇山請、与余交未得相會、薇山以月之初□東、而命家人留余宿焉。而山口順、中野壽代為主人、待遇殊厚。順号醉石、以善英語、来為教官。坐談中知其為大坂人、其父則余所識也。頓作舊相識之想。小酌微醉、就寝。

剛齋…増本剛斎カ。

田端和…田端和助カ。伊勢の人。『登門録』に名が記載されていることから、泊園書院に学んでいたことがわかる。(『登門録』原稿一(LH2/丙

108―1))

野里・佃…現在の西淀川区に属する。

尼崎城…兵庫県尼崎市にあった城。江戸時代初期に築城された。

青山…現在の西宮市西北部に位置する。

櫻井俟…櫻井忠興（一八四八―一八九五）カ。櫻井忠興は幕末から明治にかけての大名である。文久元年に十四歳で摂津尼崎藩主松平家七代となった。西南戦争に際して日本赤十字社の前身である博愛社の創設に尽力した。（『日本人名大辞典』）

神戸…現在の兵庫県神戸市あたりを指す。

楠公廟…現在の兵庫県神戸市中央区多聞通にある湊川神社を指す。折田五峯はここの宮司であった。

折田五峯…（一八二五―一八九七）。名は要蔵、字は年秀、五峯は号である。薩摩の人。藩校造士館に学んだ。弘化三年に江戸に出て昌平黌に学んだ。元治元年に島津久光が楠社造営を企画するに際して参画した縁故によって明治六年に湊川神社の初代宮司となった。（柴田清継、蔣海波「鄭孝胥と神戸、関西の文人たちとの文藝交流」『武庫川国文』七四、武庫川女子大学国文学会、平成二十二年、一七頁）

須磨…摂津の国の地名。現在の兵庫県神戸市須磨区にあたる。

舞妓…現在の兵庫県神戸市垂水区の南西部にあり、明石市に接する位置にある。

明石…現在の兵庫県明石市当たりを指す。

大久保…現在の兵庫県明石市大久保町にあたりを指す。

土田…現在の兵庫県朝来市和田山町あたりを指す。

加古川…現在の兵庫県加古川市に位置する。

阿弥陀…現在の兵庫県高砂市阿弥陀あたりを指す。

姫路…現在の兵庫県姫路市にあたる。

網干…現在の兵庫県姫路市網干区あたりを指す。

龍野村…現在の兵庫県たつの市あたりを指す。

金剛…現在の兵庫県たつの市揖保川町にある

室津…現在の兵庫県たつの市にある播磨灘に面する港町である。

那波…現在の兵庫県相生市那波あたりを指す。

有年…現在の兵庫県赤穂市有年あたりを指す。

播州…播磨国。現在の兵庫県南西部あたりを指す。

備州…備前国、備中国、備後国の総称である。ここでは、兵庫県から岡山県へと入ったことを示している。

三石…かつて岡山県南東部の備前地域に存在していた町。

吉永…現在の岡山県備前市吉永町あたりを指す。三石と隣接する。

中野壽…中野寿吉（一八六五―一九一二）。御野郡福田村の生まれで、泊園書院の塾頭となり、閑谷学校の学務を行った。また、備前紡績の専務取締役のほか、備前陶器、中国鉄道、御野銀行の各取締役に就任した。さらに吉備紡績の社務総括責任者となったほか、一時福浜村長を務めたのち、京都紡績常務取締役、東讃鉄道取締役などを歴任した。（横山俊一郎「補章Ⅰ　泊園書院の教育と明治・大正の実業家」『泊園書院の明治維新』、清文堂出版株式会社、平成二十九年、二二〇頁）

西薇山…西毅一（一八四三―一九〇四）。教育者、政治家。字は伯毅で、薇山は号である。本文中に、薇山は達三郎の養子となって家督を継ぎ、過去には備州の大参事を務め、南岳が訪問した際には閑谷黌の校長及び国会代議士を務めていることが記されている。また、『泊園書生姓名録』に西達三郎の名があることから、養父の達三郎は泊園書院で学んでいたことがわかる。（浅井允晶「『泊園書生姓名録』について　附原文」『史泉』三十八号、関西大学史学会、昭和四十四年、三七頁）

山口順…山口酔石。詳細不明。本文中には、英語が上手く、教官を務めてお

り、その出身は大阪で、酔石の父と南岳は面識があることが記されている。

十五日。晴。将釋菜于大成殿。朝食後走大門前。先視其結構、講堂在中央、其右為大成殿、其右為芳烈公廟、々右有大塚、講堂之左在大阜、呼為防火山、山西有生徒舎三、宇垣以周之垣疊石作、之高五尺餘、延袤四百餘歩。而堂也、廟也、舎也、皆各有門、實一小城也。乃先赴大成殿、拾石階十餘級。有門、々之内悉甎、而左右廊以達殿。々大東西三歩、南北四歩、中央有木臺、上又有一臺、朱之臺皆八角、朱臺即龕也。前半剖則中有青銅方匣、廣凡三尺、高四尺許、中安聖像、々亦蓋青銅而鍍金袞冕十二□儼然王者之服傳、云寛永中所鑄也。拝畢至拜殿、甄甎上行釋菜式、壽為朗讀祭文、讀了。余再拝、退下殿門前階。轉升講堂、東西八歩、南北十歩、堂構輪奐、桂扉如新堂上板、而不席設圓座耳。生徒殆百、酔石進楫衆告余来、故衆皆楫、余進楫、衆楫々了。乃坐余進立案、東為講里仁第一章、講畢衆立、酔石進楫、衆降階走退、乃観公室方丈半、素朴如視其胸襟、既降講堂轉謁公廟、々今為祠。壽曰、亦有銅像、然不可得拜観之。又東観塚、石柱環之、其圍凡三歩餘。傳為埋公胞衣之處、前園皆椿、故呼為椿谷。自石垣、前沿澗水。而東数丁村、屋両三、其前有小亭。々亦一丈有半、呼黄葉亭、蓋擬藤原定家小倉亭也。舊扁二、一春水頼翁所書、一山陽所題記文、備侯東上之日收之去云、今所存則一聯耳、亦山陽所書。環坐談詩少頃、而去、到山口氏寓処。南窓頗暖、供午膳、情致甚厚。萬波某来、陪筵、蓋掌校中計簿者。飲食既畢、辞出山、壽及酔石、萬波氏送、到吉永氏待車発而去。酔石共到和氣、而別去。壽則直到岡山。此日渠車所經風景皆佳、而和氣以西沿吉井川者最美。唯回瞻間、山轉水移、不能詳眎、可惜而已。達岡山則午下牌也。鎌田粲者岡山士人、嘗在余塾間、余此遊也。与壽謀館、余于自由舎將設一雅會。云館既定五人、共遊後楽園。々在旭川東、舊藩侯所偃息、遊宴也。園廣凡二万七千餘歩、余曹過西門、入立小池上以望。又轉過竹塢楓圃、登小邱、終登邱南小樓時、佐藤馬、小郷冨亦来。二士亦嘗遊余塾者、而家距岡山里許、聞余来而来會。亦与鎌、中二氏、有所謀云既而行。厨来、美酒具皆四人所供余也。乃飲、乃吟、乃評園中諸景、據四人言凡屋字□曰大館、曰延養亭、曰臨漪軒、曰望湖閣、曰茂樹庵、曰廉軒池、曰流觴店、曰利休堂、曰新亭、曰茶寮、曰観騎亭、曰観射亭、而舞臺及奏楽舎附焉。為林三、一則櫻、一則梅、一則楓、而松点之、竹圍之。為嶼三、而池以環之、池水引旭川支流也。今則水軒池倒、而不流、其観非半日之遊所能尽云、余則指城樓、以為第一勝。蓋樓在正南、俯臨園者、足見舊侯用意也。余曹所登樓、則流觴店。樓下設両搨、々間奇石聳矣、激水則石間、皆浼々潺、人踞搨、以擬蘭亭流觴也。其用意亦至矣。指談之間、原田西疇来。従先子学者、今為撿事在此地。善詩文、善画、善印篆、明治初年戦于兵部、轉于電信局、官極高、蓋有功于朝廷不可以一二數也。中間有故罷官逍遥于京摂間、近歳再官于司法云。於是談話、風生、興情愈旺、不知夕陽已没。園禁點燭、蓋警於火也。此夕月幾望、樹杪既見銀盤已而。園中如畫、樹影布地、東坡承天寺夜景移来在此園。衆皆曰、乗燭之禁似為吾曹賞月之地。勧杯、愈劇快酔、而散。又集于自由舎、西疇更伴鶴田丹邱、名朗字□□、佐賀人。与西疇同職、亦善詩。再命酒、助談。四生有故先去。西疇、丹邱与余等三人環坐、快飲、至夜半而会。

釋菜…略式の釈奠を行うこと。

芳烈公…池田光政。

壽…中野寿吉。

里仁…『論語』の「里仁」を指すのであろう。

黄葉亭…文化十年に閑谷学校内に来客の接待や教職員及び生徒の憩いの茶室として建てられた。頼山陽や菅茶山などの儒者や文人を迎え、親交を結ぶ場としても活用された。（「黄葉亭　特別史跡旧閑谷学校」http://shizutani.jp-map/ja-map-022、令和元年、十二月五日アクセス）

藤原定家小倉亭…藤原定家（一一六二―一二四一）が京都の小倉山の山荘で小倉百人一首をまとめたとされているが、おそらくこれを指す

ものと考えられる。藤原定家は鎌倉時代の歌人で、百人一首の選者として著名である。（『日本人名大辞典』）

春水頼…頼春水（一七四六―一八一六）。江戸時代中期、後期の儒学者、詩人である。頼山陽の父。（『日本人名大辞典』）

山陽…頼山陽（一七一八―一八三二）。江戸時代後期の歴史家、漢詩人、文人である。頼春水の長男。十八歳のときに江戸に出て経学、国史を学び、のちに京に上って私塾を開いた。著書に『日本外史』、『日本政記』、『山陽詩鈔』などがある。（『日本人名大辞典』）

山口氏…山口酔石。

萬波某…詳細不明。

吉永氏…詳細不明。

和氣…岡山県南東部に位置する。

吉井川…現在の岡山県東部を流れる川。旭川、高梁川と並び、岡山三大河川の一つとされている。

鎌田粲…詳細不明。

後楽園…現在の岡山県岡山市北区にある日本庭園で、日本三名園の一つである。江戸時代初期に岡山藩主池田綱政によって造営された。

佐藤馬…佐藤馬太郎。備前国御野群の人。『登門録』に名が記載されていることからも、かつて泊園書院に学んでいたことがわかる。（『登門録』（LH2／丙122）、二六頁）

小郷富…小郷富次郎。備前国御野群の人。『登門録』に名が記載されていることからも、かつて泊園書院に学んでいたことがわかる。（『登門録』（LH2／丙122）、二六頁）

鎌…鎌田粲。

中…中野寿吉。

原田西疇…本文中に「従先子学者、今為撿事在此地。善詩文、善画、善印篆、明治初年戦于兵部、轉于電信局、官極高、盖有功于朝廷不可以一二數也。中間有故罷官逍遥于京摂間、近歳再官于司法云」とある。ここから、当時は岡山で検事を務めていることがわかる。

東坡承天寺夜景…蘇東坡の「記承天寺夜遊」を指すものと考えられる。

鶴田丹邱…名は朗。佐賀の人。原田西疇の同僚で、詩を善くしたことが本文中に記されている。

十六日。晴。朝餐已畢、乃辭旅舍去。訪西疇寓居、西疇喜迎出。舊時、諸印譜及吟稿相示。二十年外事、一々在眼、丹邱等諸子皆来集、情趣又盛、日近午辭去。途弔本城氏轉訪鎌田氏、供食頗美食、畢則渢車方発、壽、粲、馬、冨皆送、至停車場。情誼之厚、可喜也。回瞻之間、已到長岡、乃命和舐筆以待、盖欲描山水之概也。過瀬戸、則山巒皆不凡、相依者、獨立者、疊者、並者、點以絳林紫蕤、和描其大概于飛翔之際、其忙特甚、既而江崖以東、水流漾々、隔水村屋、皆在水、北山麓稍闊、則水碧一帯従作州。来者似眼達其源水。東之邑即和氣、巨屋大厦瀬、水倚山、車輪忽叟然已上長橋、長槁蜿々而東而北長盖數百歩、吟情頓為絶景所撩乱、詩句欲成、而已達和氣停車場、想酔石昨日相送巒岸之状、又到吉永、想中野生相迎之状、至三石則淡雲遮日、風氣凄冷、點燈以向隧口、恍疑既已近黄昏、出隧則微雨打窗。山色洗然、雨脚雲痕、半濃半淡、山似活動者。過有年、那波、到龍野則天然霽、而風頗烈窗、不可啓。遂至加古川、則薄暮也。下車、訪山田孝堂、孝堂有約、相待久矣。延余于其門人加古川善翁宅、善翁解韵事与小原竹香相識云。置酒慰労、孝堂与其子勤與来。快話添興、二更就寝。山田氏父子約明日茶醼、而会。

西疇…原田西疇。

丹邱…鶴田丹邱。

本城氏…詳細不明。

鎌田氏…鎌田粲。

壽…中野寿吉。
粲…鎌田粲。
馬…佐藤馬太郎。
冨…小郷冨次郎。
和…田端和助カ。
酔石…山口酔石。
山田孝堂…（一八一六―一八九四）。播磨国の人。儒学者。懐徳堂の出身者で、後に小野藩の藩校帰正館の教授となった。孝堂は自らの塾の文会には必ず藤澤東畡を招くなど、以前から泊園書院と交流があった。また本文中に「齢七十有四、儒雅風流為一州名士、善詩文、嗜画、經歴實夛、覧観極冨、交友極廣、故談話極快」とあり、雅事も善くしていたことがわかる。（横山俊一郎「山田孝堂の学術と実践―幕末の懐徳堂・泊園塾と維新の〈実務家〉―」『文化交渉』第三号、関西大学大学院東アジア文化研究科、平成二十六年、一二五―一三九頁）
加古川善翁…本文中に山田孝堂の門人であることが示されている。
小原竹香…作州津山藩の人。明治維新後、京都権参事に任じられたが、何度も嫌疑にかけられ、故郷に護送されて幽囚された。明治五年に奈良県の典事となったが、すぐに職を辞して大阪に移り住んだ。詩文を能くし、多くの文人墨客と交わった。また古書を好み、多くを収蔵していた。（石田誠太郎著『大阪人物誌』巻二、石田文庫、大正十五年、六四頁）
勤…山田孝堂の子。本文中に「勤、年僅弱冠而詩文燦爛冨于才、而勤于学、謙遜恭儉其性尤美。今歳春行束脩于余門時、々寄文請正矣」とあることから、泊園書院に入門していたことがわかる。孝堂には子が二人いることが知られているが、このうち泊園書院で学んだのは次男の窪田修佐のみである。窪田修佐は勤堂とも称し、その著書には『京都繁昌記』（学文館、明治二十九年）がある。（「山田孝堂の学術と実践―幕末の懐徳堂・泊園塾と維新の〈実務家〉―」及び『京都繁昌記』）

十七日。晴。夙起推敲。昨日途上所得諸作。朝食後使剛齋及和往観曾根高砂諸勝、余以既已観之不往已而。孝堂及勤、井上松陽、佐々木静堂等来。乃團欒快話、且揮毫、且敲枰、雅興稍旺。而善翁報茶筵方成、偶剛齋等亦歸。乃共往、就筵、々在加古川中洲鋏橋之北半丁許、洲觜斜連、觜頭有小旆以標筵。々二、一為煎、一為抹。余曹到東岸呼航、而渡立洲頭以望處々、林巒皆似假設者、獨北方諸山嶂崒可喜、孝堂為指示諸巒、曰某豊公陣處、某三木属城、某山赤松氏属城所在某村浮田氏所軍、而南北朝以来地名之録于史籍者極多、々在二三里以内、其詳不能一々記之要之、山水明媚、白沙翠竹別作一境者、似供茶筵之場也。其上筵者孝堂、齢七十有四、儒雅風流為一州名士、善詩文、嗜画、經歴實夛、覧観極冨、交友極廣、故談話極快。其子勤、年僅弱冠而詩文燦爛冨于才、而勤于学、謙遜恭儉其性尤美。今歳春行束脩于余門時、々寄文請正矣。松陽年近耳順、以医名于一方、詩及棋其餘技之秀者、為人温而慤、似有所守風度最可喜可愛。喜多松籟年与松陽相若、善茶善笙、而嗜詩画、為人温和、良易。亦一方之秀静堂、年猶壯医術大行、而嗜詩。長尾国光亦善詩。而前田積翠奔走經営于其間、善翁實筵主。而衆之楽為楽。不欲以一技称退然、籍草地坐亦可愛其体肥、故或目為蟾翁、々以為遂以自号。胸襟可懐、其子善遊学于東京。此日偶歸、而以病故不上筵、茶一椀而酒次焉。有調羹者、行酒者、蟾翁手自割鮮作羹以勧杯、々行、乃速衆皆微醺、得詩者、争録之、又交吟之、一唱一和、興情脱塵。仰見諸山、衆巒殆似与一筵諸子争秀色。既而剛齋有故不得不歸、乃告別衆、哄然留之強辭而去。乃使和相伴先去、忽聞洲北有笙声、々穿岸竹、混水声鏘々鏗々、使人魂飛神、走急往観之、則松籟也。於是按譜相和、頓忘塵世之汚、又上筵、把杯痛飲數杯、忽思与剛齋共来、何可獨留乎、又思諸子為余設筵、結歓如此盡情如其、自楽自喜、亦余之由也。則何

可割興、而去乎。負新交厚意固不可也。失舊知情誼亦不可也。余之進退殆窮、偶有人来報、剛齋猶未発、乃断乎、辭去。勤送至停車場、厚情可掬、而吾處之也。薄不免慊然于心也。遂与剛齋、和共搭瀘車、實酉上牌也。至明石則點燈、轉至須磨、月光極清遂啓窓、賞之不覚露氣沿衣、至神戸換車道、至梅田与剛齋別、戌牌歸家。

剛齋…増本剛斎。

和…田端和助カ。

曾根…現在の兵庫県高砂市に位置する。

高砂…現在の兵庫県高砂市に位置する。

孝堂…山田孝堂。

勤…山田勤堂。

井上松陽…当時、六十歳近くであったことが本文中に記されている。さらに、「順以医名于一方、詩及棋其餘技之秀者、為人温而愨、似有所守風度最可喜可愛」とあり、詩や将棋にも優れていたようである。

佐々木静堂…本文中に「年猶壮医術大行、而嗜詩」と記されている。

善翁…加古川善翁。

喜多松籟…本文中に「善茶善笙、而嗜詩画、為人温和、良易」と記されている。

長尾国光…詳細不明。

前田積翠…詳細不明。

蟾翁…加古川善翁。

中洲銕橋…現在の兵庫県尼崎市西高洲町に位置する。

豊公陣處…三木合戦の際に羽柴秀吉が三木城を攻略するために周囲の山に包囲網を張ったが、そのうち本陣を置いた平井山を指すものと考えられる。この戦は、天正六年八月から天正八年一月まで続き、秀吉にとって最も長い戦いとなった。（小野利教著『兵庫県管内史談』、教育書房、明治二十六年、一九―二二頁）

三木属城…三木合戦は別所長治が織田信長に対して謀反を起こしたことから始まっているが、長治が籠城することとなったのが三木城である。この際、東播磨の勢力が挙って長治方につくこととなったが、それらの城の一つを指していたのであろう。（炬口又郎著『兵庫県郷土史談』、吉岡平助支店、明治二十七年、一一―二二頁）

十八日。晴。剛齋来、謝西遊之労、且告將歸村也。未牌會永野氏筵。々在淀橋東。倚欄、弄棋、猶作在備播之想、遂訪木原唯松于宇於孛樓。蓋唯松與廣岡、石崎、田中及余、約一宵閑宴、以遣幽懐也。美話佳談、唯在山水、忘世脱俗。實要杯觴、亦人間清福哉。亥牌會散。

剛齋…増本剛斎。

永野氏…永野秀水カ。

木原唯松…詳細不明。

廣岡…廣岡巴カ。

石崎…石橋精處カ。

田中…田中越山カ。

十九日。晴。作書、答四方問遺。偸閑格忙、亦人世之常。而与去月仲九同斯忙、亦一奇。

二十日。晴。遠藤松雲會優游吟社友于東北園、余亦被招。松雲名謹、字士信、長州人、為造弊寮長官、性好雅事、嗜詩文、碧明社優游社皆所于與也。此日會者小野湖山、林樑窗、澄川□□、宮崎雪叟、猪木熊山、石橋雲来、富岡□□、福本子鸞。探韵賦詩、磨墨試画。韻致清雅。戌牌會散。与樑窓、子鸞同歸、子鸞自門外別去。樑窗入室、弄棋三両局、而去。

遠藤松雲…詳細不明。本文中から、造弊寮の長官を務めながらも、雅事を好

み、詩文を嗜む人物であったことがわかる。

優游吟社…詳細不明。本文中から、遠藤松雲、藤澤南岳、小野湖山、林樑窗、澄川□□、宮崎雪叟、猪木熊山、石橋雲来、富岡□□、福本子鸞らが参加していたことがわかる。会合では詩を詠み、書画を揮毫していたようである。

造弊寮…造弊寮は明治四年、現在の大阪府大阪市に創業された。この設立は規則の制定から機械の据付に至るまで、造弊頭となり、大蔵大丞を兼任した井上馨の功績が大きい。（高垣寅次郎著『近代日本金融史』、全国地方銀行協会、昭和三十年、五九―六二頁）

澄川□□…澄川篁坡カ。明治二十五年一月五日の『七香斎日録』には「与秋荘訪澄川篁坡、官于裁判所、而大好古書及名賢真蹟」と、稲垣秋荘とともに澄川篁坡を訪問した様子が記されている。ここには、澄川篁坡は裁判所の官を務め、古書や名賢真蹟を大いに好んでいる人物であることが記されている。（『七香斎日録』丁LH2／甲208―4）

宮崎雪叟…詳細不明。

猪木熊山…（一八四三―一九〇三）。紀伊国の人。大阪で医者として活躍した。漢学者の森田節斎に学び、漢籍に通暁した。（『日本人名大辞典』）

石橋雲来…（一八四六―一九一四）。漢詩家。播磨の人。大阪北区に住み、雲来社を主宰した。その著書である『雲来唫交詩』には小原竹香や江馬天江の名があるように、ここからはその交遊関係の一端が窺い知れる。（稲村徹元、井門寛、丸山信共編『大正過去帳』、東京美術、昭和四十八年）

富岡□□…詳細不明。

福本子鸞…詳細不明。

二十一日。晴。午後獨歩、會咬菜社友于松濤氏、同賦冬日野興、皆成。又賦新寒体限五律、未成。而日薄虞渊、乃辭歸。椋陰送、至志喜田橋、而別。

松濤氏…後藤松濤。

虞渊…中国の伝説上の場所で、太陽が沈むところ。

椋陰…中嶌椋陰。

二十二日。晴。尾崎雪翁以画會友人于備一亭、有茶筵有酒席有揮毫場。余以此日夛所約、早往早会、不能試一毫。直走菅廟講畢、敷田翁方来辭而先去。遂會逍遥遊社友于植木茶屋、到則子錫、洗藏、子弘、純叔、子同、岡田子文、山本連玉、同□弼、清原真弓皆在焉。以遣懐為題、以宜痴遅疑為韵倣唐子西体也。詩成則黄昏、乃散、余命車先歸。更往堺卯樓、會吉原棋伯追悼筵也。室設霊位壁、余所撰墓誌堅幅前、安牌子香花具矣、堂則會者数十名位、于彼娶于此各以其偶相對。余亦与天真一二局、而辭歸。

尾崎雪翁…尾崎雪濤（一八二八―一九一〇）カ。日本画家。文人画に優れ、書にも精通していた。（『日本人名大辞典』）

備一亭…備一楼。料理店。中央区備後町一丁目にあった。

敷田翁…敷田年治。

子錫…関子錫。

洗藏…田部洗藏。

子弘…中井子弘。

純叔…近藤純叔。

子同…近藤子同。

岡田子文…詳細不明。

山本連玉…詳細不明。

同□弼…山本永弼。

唐子西…唐の人。

堺卯樓…鵜野卯兵衛が営んでいた料亭。『七香斎日録』上でしばしば煎茶会や

書画会などの雅会の場として使用されている。

吉原棋伯…詳細不明。

霊位…位牌。

天真…真部天真。

二十三日。晴。章旗滿街裙帯来往。午後余亦與士廉訪坪井氏莊。々主昨帰其家、乃入其園庭、観楓而去。直訪田結莊千里、観其所藏三忠硯、千里又出示一書画帖、々所載天保嘉永間名家、而往々有小簽、或書此画無韵致五字、或題此可属甲部、或曰某不知画法可削会、盖千里所品評、々語確當、眼識不凡。大慰尋常畫圖之想、話者少頃而会。訪澄川氏、不遇乃歸。

士廉…稲垣士廉。

坪井氏…詳細不明。

澄川氏…澄川篁坡カ。

二十四日。乍雨乍晴。山田俊平、桑田墨莊、永野秀水来。俊平將歸作州也、乃小酌別之。与秀水弄棋、一杯一枰、亦自有情。致暮散去。

山田俊平…美作国の人。『登門録』に名が記載されていることから、泊園書院に学んでいたことがわかる。(『登門録』(LH2/丙122)、二六頁)

桑田墨莊…詳細不明。

作州…美作。現在の岡山県北東部を指す。

二十五日。晴。訪彡木氏、日没後歸。乃課生徒復文、課方畢、士廉来。小飲閑話、殆至三更。

彡木氏…多木舞湾カ。

士廉…稲垣士廉。

二十六日。晴。其争社友會于第一樓。高橋江春為月幹、會者十有二人、興趣盛。戌牌与三嵜、白山二氏共歸。

高橋江春…(一八五四―一九三八)。播磨国の人。大阪で眼科を開業した。坂田泰然の四男として生まれ、明治六年に加古郡稲屋村の医師の高橋家の養子となった。明石の松井保尚に師事して西洋医学を学んだ後、姫路県立病院に長く務めたが、明治十四年に辞して恒高病院を開設、その後明治二十三年に眼科専門病院を開設した。(『日本洋学人名事典』、柏書房株式会社、平成四年、二二三頁)

三嵜…三崎厚斎カ。大阪老松町の医師。三崎厚斎は南岳の従兄弟にあたる人物である。南岳の三男である驎之助(黄圃)を養子とした。

白山…白山滴翠カ。

二十七日。晴。狸郷来。致西山完瑛所寫寒山拾得双幅也。幅舊□□所画係八尾某寺珍藏、林幸太郎借之、完瑛寫之、殆奪其直筆力、可喜可感。

狸郷…末野狸郷カ。

西山完瑛…(一八三四―一八九七)。日本画家。名は謙、字は子受。完瑛は号である。父の西山芳園に画法を学び、人物、花鳥を能くした。また、儒学を後藤松陰に学んだ。

寒山拾得…唐時代の詩僧である寒山と拾得。画題によく用いられる。(『日本国語大辞典』第五巻)

林幸太郎…詳細不明。

二十八日。晴。澄川、中井二氏来。鼎坐品古書論古画、情趣自別、夜小川南堵来。

澄川…澄川篁坡カ。

中井…中井子弘カ。

小川南堵…詳細不明。

二十九日。天陰。与士廉往観昌隆社茶醼。分為三場、第一為書画展覧場、第二則茶筵共在北郊渡邉氏宅、第三亦茶筵為北郊永藤氏宅。筵皆清爽、茶氣頗芬何独両腋生風而已乎。此日所展書画二十餘幅、皆佳、其尤者則竹田淡彩竹林漁樵圖絹巻大幅遠藤松雲所珍襲、文晁淡彩淵明帰荘圖綾本大幅松本氏所蔵、五柳翠滴、疎竹如揺、淵明顔則怡然含咲、稚子在室者亦有喜色、筆々皆活動。半江淡青緑秋景山水貝塚木谷氏所蔵、介石淡彩天香書屋圖長谷田所蔵、蕪村淡彩夏景山水上野氏所蔵、半江青緑柳陰山水堺益山氏所蔵、文晁松陰観瀑圖、水墨米法山水共貴田氏所蔵、介石水墨枯木竹石圖阪上氏所蔵、梅逸着色群卉圖福島氏所蔵、半江着色万事吉兆圖益田氏所蔵、以上皆係絹本。竹田水墨秋景山水藤田氏所蔵、山陽半江合作水墨山水京都伊谷氏所蔵、草坪青緑山水中村氏所蔵、海屋水墨山水上野氏所蔵、以上係紙本。山陽半江山水則半江添中景人家、遠山以為雪景也。山陽又題數十字、論其差舊案、亦一奇品。評之間、將近午。乃轉観盆栽于菊亭、亦一風趣。中有名龍騰枝端着如豆莢者、即花也。是最奇。遂命車、訪友樵、方病不得晤而歸。未牌訪山崎、永野二氏、薄暮歸家。

士廉…稲垣士廉。

永藤氏…永藤淇翠堂カ。永藤淇翠堂は『五十周年記念茗讌圖録』に社員として掲載されている。(『五十周年記念茗讌圖録』乾、昌隆社、大正十五年)

竹田…田能村竹田(一七七七―一八三五)。江戸時代後期の画家。豊後の人。頼山陽らと親交を持ち、詩や書にも優れた。(『日本人名大辞典』)

文晁…谷文晁(一七六三―一八四一)。江戸時代後期の画家。江戸の人。加藤文麗、渡辺玄対らに師事した。田安徳川家に仕え、「集古十種」の挿絵も描いたことで知られる。(『日本人名大辞典』)

松本氏…松本松蔵(一八七〇―一九三六)カ。実業家。養父は関西の実業家の松本重太郎である。九州電気軌道の専務、第二代社長を十年にわたり務めたが、在職中に九州電気軌道不正手形事件を起こした。松本松蔵は昌隆社の五十周年記念茗讌の際にその所蔵品を展示していることから、この松本氏も松本松蔵を指すのではないかと考えられる。(九州電気軌道編『躍進九軌の回顧』、九州電気軌道、昭和十年、四六―五五頁及び『五十周年記念茗讌圖録』乾)

半江…岡田半江(一七八二―一八四六)。江戸時代後期の画家。岡田米山人の子。父から書画を学び、伊勢津藩大坂蔵屋敷に仕えた。頼山陽、田能村竹田らと交友を結んだ。(『日本人名大辞典』)

木谷氏…詳細不明。

介石…野呂介石(一七四七―一八二八)。江戸後期の文人画家。紀州藩に仕えた。(『日本人名大辞典』)

長谷田氏…詳細不明。

蕪村…与謝蕪村(一七一六―一七八四)。江戸時代中期の俳人、画家。二十歳頃に江戸に出て、早野巴人に俳諧を学んだ。師の死後に関東、奥州を遊歴し、宝暦元年に京都に移り住んだ。(『日本人名大辞典』)

上野氏…上野理一(一八四八―一九一九)カ。新聞経営者。号は有竹。丹波篠山の人。丹波青山藩御用達の両替商を営んでいた上野保兵衛の長男として生まれる。明治十三年に兵庫県川辺郡上席書記となるがものの、細見貞の紹介で朝日新聞社に入社した。翌年、共同出資者として経営に参画し、以来村山龍平と共に東京、大阪両朝日新聞を発展させた。また、書画の蒐集家としても著名であり、昌隆社の茶醼にもしばしばその所蔵品を展示している。(『朝日日本人物歴史事典』及び朝日新聞社編修室編『上野理一伝』、朝日新聞社、昭和三十四年及び『五十周年記念茗讌圖録』乾)

益山氏…詳細不明。

貴田氏…詳細不明。
阪上氏…詳細不明。
梅逸…山本梅逸（一七八三―一八五六）。江戸後期の文人画家。尾張南画の代表的画家である。（『日本人名大辞典』）
福島氏…詳細不明。
山陽…頼山陽。
草坪…高橋草坪（一八〇四―一八三五）。幕末の文人画家。豊後の人。田能村竹田の高弟である。（『日本人名大辞典』）
海屋…貫名海屋（一七七八―一八六三）。江戸後期の文人画家、書家、儒学者。とりわけ書に優れ、幕末の三筆の一人に数えられる。（『日本人名大辞典』）
藤田氏…藤田伝三郎（一八四一―一九一二）カ。実業家。久原庄三郎の弟である。維新後、大阪で軍靴を製造し、陸軍省の用達商となり、西南戦争で巨利を得た。明治十四年に藤田組を結成し、小坂鉱山などを経営した。明治十八年には大阪商法会議所の会頭となった。昌隆社の茶醼では時おりその所蔵品を展示しているため、この藤田氏は藤田伝三郎を指すものと考えられる。また、明治三十五年に結成され、多くの実業家が参加した煎茶団体である十八会に参加していることからもその煎茶趣味の一端が窺えよう。（『日本人名大辞典』、『五十周年記念茗讌圖録』乾及び芝川又四郎著『芝蘭遺芳』、昭和十九年、三五二―三五三頁）
伊谷氏…詳細不明。
中村氏…中村陶夫カ。兵庫の人。中村陶夫は昌隆社の五十周年記念茗讌の際にその所蔵品を展示していることから、この中村氏も中村陶夫を指すのではないかと考えられる。（『五十周年記念茗讌圖録』乾）
友樵…妻鹿友樵カ。妻鹿友樵（一八二六―一八九六）は幕末から明治にかけての医師である。大坂の人。内科医術のほか、詩文、書画、武芸に優れ、私塾の心遠舎を開き、漢学を教えた。明清画の蒐集家としても著名である。（『日本人名大辞典』及び藤澤南岳著「妻鹿友樵墓碣銘」『七香斎文雋』、泊園書院、大正二年）
淵明帰荘…五柳先生と自称した陶淵明が「帰去来辞」を作って荘園に帰る図。
三十日。晴。月例試業。晩澤田、儉二氏来。自讃余従兄也。夜坐話舊、遂留宿、夜微雨。
澤田…澤井甃平カ。
儉…詳細不明。
十二月一日。晴。奉讀□聖勅。田端和、芳谷弥為掌讀、儉将歸、乃書小詩、贈之。差午散策北郊、帰途訪永野氏。森華、岡本、和田三兄亦来。環坐敲枰以消半日。此日余局戦頗利、衆大嗟賞。夜帰途上徐観夜市、亦大可慰情。
芳谷弥…芳谷弥太郎。讃岐高松市の人。御野群の人。『登門録』に名が記載されている。（『登門録』原稿五（LH2／丙108―5））
儉…詳細不明。
永野氏…永野秀水カ。
森華…森鼻宗次カ。
岡本…岡本撫山（一八四〇―一九〇四）カ。明治維新の際に銅会所に務め、明治三年に造弊寮吏となった。後に大蔵省小書記官に転じて会計部長となり、二十余年間務め、正六位勲六等を受章した。懐徳堂で学び、また後藤桐坪に学んだ。また、水碧沙明詩社を結成して文雅を楽しみ、逍遥遊社に入った。著書に『浪華人物志』、『浪華年代記』、『浪華墓碑誌』がある。（『東区史』第五巻、二九〇―二九一頁）。
和田…和田小耕カ。和田小耕は『雲来唫交詩』三（明治十三年）にその詩が収

録されていることから、石橋雲来とも交友があったことがわかる。ここでは淡路の人として掲載されている。

二日。晴。訪松雲、座上始与中村勤者晤亦以文事官于造弊寮者、話詩、半晌而辭去。更散歩網洲時、夕陽在山。々色皆紫映、発沿岸、黄樹亦一活圖、及冥色漸遍回筇、而歸。

松雲…遠藤松雲。

中村勤…詳細不明。本文中に造弊寮の官を務めていたことが記されている。

三日。晴。獨坐校圓珠經、盖欲作彙纂也。夜文會、々將畢、雨大至。

圓珠經…論語の異名。

四日、雨。藤陰来話。々及遊備事、大悔其不同遊、薄暮弔雲林院氏、雲堂歿也。雲堂年八十□以矍鑠、自許今春遊勢州、得詩数篇、而歸。々後疾作癒而又加、遂不起、雲堂風骨氣概近世所希、實可惜矣。

藤陰…木村藤陰。

備…備州。

雲林院…雲林院雲堂。本文中に、「風骨氣概近世所希」とある。また、伊勢に遊んだ際に詩を数篇得たというエピソードからは、詩を善くする人物であったことが想像される。

勢州…伊勢。現在の三重県にあたる。

五日。晴。夜生徒作講談會。此會以土曜日為例、余不臨之者久矣。此夜為説寒之不可不堪以奨勵生員、亥牌會散。

講談會…本文中に、土曜日に例会が開かれていたことが記されている。

六日。晴。菅廟吟會。會者十有九名。同賦寒夜待友、而探韻若得下平、則更待為訪及探、子錫、連玉、子文、雪翁皆得上平、純叔及余他年少者皆得下平、一座大歓咲、既而詩皆成、乃承饗酒酣、而日没於是散会。轉上津知多樓、盖其争社友長谷川誠一以九月仲一歿、故社友設追悼會也。至則酒方闌、而弄棋者、詠邦風者、往々、作伍。戌牌會散。此會也、石碕、花田、澤井、白山、末野五氏為幹事、故事々整頓、衆皆悦。

平…平声のこと。漢字の四声の音の中で、平声に属する三十の韻。これは更に上平声と下平声の二つにそれぞれ十五ずつ分けられる。

及探…詳細不明。

子錫…関子錫。

連玉…山本連玉。

子文…岡田子文。

雪翁…尾崎雪翁。

純叔…近藤純叔。

津知多樓…料亭。詳細不明。

石碕…石崎精處。

花田…詳細不明。

澤井…澤井甃平。

白山…白山滴翠。

末野…末野狸郷。

七日。晴。天真来。閑棋両三局、而去。

天真…真部天真。

八日。天陰欲雨。差午日下部鳴鶴、和田小耕来。乃共網洲飲于□□樓、久保田昌亦来。鳴鶴今夏遊清國、観金陵、西湖、乍浦、上海諸勝地、故談極快。時雨大

至、一江烟雨鎖沈黄塵、而杯酒枰石、輔興添趣、胸襟之快、亦近時所希、薄暮歸家。

日下部鳴鶴…（一八三八―一九二二）。明治大正時代の書家である。もと近江彦根藩士である。明治二年に太政官大書記官となった。明治十三年に楊守敬が来日すると、巖谷一六らとともにこれに学んだ。（『日本人名大辞典』）

久保田昌…窪田昌と同一人物か。

金陵…南京市。

西湖…杭州市。

乍浦…平湖市あたりを指す。

上海…上海市。

九日。晴。又飲□□樓、其争社友一年終會也。唯松為會幹、會頗盛矣。社員不會者両三名耳。戌下牌會散。

唯松…木原唯松。

十日。晴。剛齋、秀水来、論詩話文。剛齋已去、与秀水共訪夛木氏。天真亦来、観棋數局、而散。

剛齋…増本剛斎。

秀水…永野秀水。

夛木氏…多木舞湾カ。

天真…真部天真。

十一日。晴。狸郷来。敲枰三四局。

狸郷…末野狸郷。

十二日。晴。菅廟講筵後、訪松雲、又訪精處。精處、此日會友于其宅也。澤井、白山、花田、田中、末野、高橋、真部及余皆會焉。而飲頗盛人夛酔、余与白山氏先歸。此日山田俊卿招飲、余不能往。

松雲…遠藤松雲。

精處…石崎精處。

澤井…澤井甃平。

白山…白山滴翠。

花田…詳細不明。

田中…田中越山カ。

末野…末野狸郷。

高橋…高橋江春カ。

真部…真部天真。

十三日。晴。為真正會期日、而余患微痢、乃使人謝不能會。午後俊卿来迎曰、以補昨日之缺耳。乃往森華、永野、真部、岡本皆来。一棋一觴、興情自快適、酉牌歸、偶土倉鶴来。對話至戌牌。

真正會

俊卿…山田俊卿。

森華…森鼻宗次カ。

永野…永野秀水。

真部…真部天真。

岡本…岡本撫山カ。

土倉鶴…詳細不明。

十四日。晴。増本有吉寄物子真蹟来云、此必真者、欲以贈父剛齋幸賜一覧展之、則与菊池重威所蔵者筆畫全同、乃請重威携来、相照其詩曰携来妙偈秋含情、蒿菊

巖楓興轉清、病後難□獨醪理、坐教慧遠似淵明、体裁少異字畫全一、一則款茂卿二字、一則有印耳。一則脱病字書諸末形影難辨、要之、此詩有搨本、故學而疑之耳。二幅共其影乎。重威更携二三幅。其一則物子五絶小幅未佳、其一則南郭柱聯書、護社故人尋歳月、梁園上客更風流、筆法頗正、知為真迹、壁之品評其長短。天真及緒方拙齋、田村□□来。環坐煎茗以助雅話、拙齋乃走使取横巻于某氏以乞鑑。曰真邪購之且請跋語、展之則録歸去来辭字体高雅、以百年外高僧所録者、而末有茂卿徂徠二印面耳。衆皆竒之、余請留之于案上、擬早朝一首、日已暮、客皆散。乃又展横巻讀之。良辰之辰作晨非微瘕也。其他字体不整者往々有之、観畢、又煎茗以自慰。

増本有吉…増本剛斎の子。

物子…荻生徂徠。

剛斎…増本剛斎。

菊池重威…詳細不明。

慧遠…慧遠という名の著名な人物は以下の二名が確認できる。一人目は東晋の僧である慧遠（三三四―四一六）で、道安に学び、白蓮社を結成して念仏行を行じ、経典翻訳を助けた人物である。二人目は隋の僧である慧遠（五二三―五九二）で、北周の武帝の行なった仏教廃止宣言に反対した人物である。（『日本国語大辞典』）

淵明…陶淵明（三六五―四二七）。東晋の詩人。名は潜、淵明は字である。二十九歳で仕官したがすぐに辞し、以後召されても官に就かなかった。（『日本国語大辞典』）

南郭…服部南郭（一六八三―一七五九）。江戸時代中期の日本の儒者、漢詩人、画家であり、荻生徂徠の高弟として知られる。（『日本国語大辞典』）

十五日。晴。午前招秋荘、共賞二幅与一巻。秋荘亦曰皆未為眞、乃柬緒方氏告之。午後訪多木氏弄棋一局。家僮報剛齋来、即歸。又共品評之、剛齋乃携其幅去。

秋荘…稲垣秋荘。

緒方氏…緒方拙斎カ。緒方拙斎（一八三四―一九一一）は幕末から明治にかけての医者である。漢学を広瀬淡窓、蘭学を青木周弼、緒方洪庵に学んだ。洪庵の養子となり、適々斎塾を継いだ。明治二十年に緒方病院、明治二十二年に大阪慈恵病院を設立した。（『日本国語大辞典』）

多木氏…多木舞湾カ。

剛齋…増本剛斎。

十六日。天寒欲雨。未牌謁先塋。歸途又訪多木氏、夜歸。

多木氏…多木舞湾カ。

十七日。晴。試生徒業、至薄暮。

十八日。晴。試業至午牌。申牌會清交會友于堺卯樓、此會也、与精處、唯松、越山、滴翠、狸郷創之、期厚于交情也。一觴一枰、以至二更。

精處…石崎精處。

唯松…木原唯松。

越山…田中越山。

滴翠…白山滴翠。

狸郷…末野狸郷。

十九日。晴。試業至薄暮。夜小野田篠菴来。秋荘亦来。鼎坐快話、殆過三更。

秋荘…稲垣秋荘。

二十日。曇。携児章赴天王田村。此日實咬菜社吟會、与竹溪、秋荘約同往、而皆

遇有事不来。故与児章逍遥于田間、小橋、野水、以媒吟心已至、則社友皆會、同賦歳晩小集、又課竹村□□圓七絶皆成。而未下牌雨大至、烟樹雲山使人為倪家画中之人。薄暮衝雨、而歸。

児章…藤澤黄坡。

小橋…現在の大阪市天王寺区に位置する。

竹村□□…詳細不明。

二十一日。晴。訪永野氏。

永野氏…永野秀水カ。

二十二日。晴。此日日南至書院例祭、先聖配亨物徂徠、中山城山二先生。乃開吟筵、与生員同賦歳晩。与友人酌、差午詩皆成、於是設宴、快話、外賓来。會者稲垣秋荘、其子馨、三崎厚齋、其子驎、木村敬次郎也。酉牌宴散。

馨…稲垣馨。稲垣秋荘の子。

驎…三崎驎之助。南岳の三男。号は黄坡、のちに黄圃。生まれてすぐに三崎厚斎の養子となった。(「泊園年表　関西大学」http://www.db1.csac.kansai-u.ac.jp/hakuen/syoin/enkaku05.html、令和元年十二月五日アクセス)

木村敬次郎…木村敬二郎カ。地方史研究者で『大阪訪碑録』(浪速叢書刊行会、昭和四年)の選者である。号は篤処。南岳に学んで多くの研鑽を積んだ。(「木村敬二郎　関西大学」http://www.db1.csac.kansai-u.ac.jp/hakuen/syoin/retsuden043.html、令和元年十二月五日アクセス)

二十三日。晴。天真来。閑棋両三局。

天真…真部天真。

二十四日。晴。論語彙纂成。自始起稿既已五年、改稿數四、此日始成。自先子従事于学殆八十年、其於論語最用力焉。其説無録故有此著、亦継述之任最重者也。

論語彙纂…明治二十五年五月に藤澤南岳著『論語彙纂』が刊行されている。おそらくこれを指すものと考えられる。これには、小牧桜泉、小野湖山、稲垣秋荘の序と土屋鳳洲による跋が附されている。

二十五日。夜訪多木氏、小耕亦来。鼎坐弄棋、二更散去。

多木氏…多木舞湾カ。

小耕…和田小耕。

二十六日。晴。修書于東京諸友。

二十七日。晴。逍遥遊社吟會、余為月幹、乃迎之于書院来。會者子錫、子文、子木、純叔、真弓、永弼、子弘及小川南堵、橋本紫玉、猪木熊山。同賦歳晩出城、薄暮會散。子文獨留与余閑棋一局、大有餘趣。

子錫…関子錫。

子文…岡田子文。

子木…詳細不明。

純叔…近藤純叔。

真弓…清原真弓。

永弼…山本永弼。

子弘…中井子弘。

橋本紫玉…詳細不明。

二十八日。晴。木原氏忘年會、々諸友于森浩氏、棋酒清娯、二更散去。

木原氏…木原唯松カ。

森浩氏…詳細不明。

二十九日。晴。与秋荘訪澄川氏不遇、乃訪清原氏。主人出示其所愛奇石、皆古谷所産有白條作瀑者、有奇巖似懸崖者、有峻峯攢立者、顆々皆异状大可吟情、主人所養亦可知。歸途与秋荘別、命車直歸。夜理一歳詩文。

秋荘…稲垣秋荘。

澄川氏…澄川篁坡カ。

清原氏…清原真弓カ。

三十日。晴。与澤井、三崎、岡田諸子棋。

澤井…澤井甃平カ。

三崎…三崎厚齋カ。

岡田…岡田子文カ。

三十一日。雨。差午洒掃室内、亀尾肇来、閑棋両三局、而去。余以今宵例与諸友守歳留之、乃約再来。夜雨歇、於是澤井甃平、亀尾肇、三崎厚齋、田中越山来會、敲枰至四更、皆散去。余敲詩待明。

謝辞　本資料の閲覧及び翻刻の許可を関西大学図書館より賜った。ここに深く御礼申し上げたい。

注

(1) 南岳の煎茶趣味については別稿を設け、詳しく論じることとしたい。

(2) 保古会については水田紀久著「南岳先生『不苟書室日録鈔』を讀む」『近世日本漢文学史論考』(汲古書院、一九八七)四八五―四八九頁に詳しい。また、保古会の活動の実態については別稿を設け、詳しく論じることとしたい。

(3) 吾妻重二編『関西大学泊園文庫自筆稿本目録稿』甲部(関西大学アジア文化研究センター、平成二十四年)から『七香齋日録』の名称が付されているものを抽出した。

(4) 前掲注2「南岳先生『不苟書室日記鈔』を読む」参照。

(5) 吾妻重二著「藤澤南岳と篆刻芸術」『東アジア文化交渉研究』六(平成二十五年)二一五―二二八頁。